

奨励

なんのために生まれて なにをして生きるのか

奨励	熊谷 沙蘭 [くまがい・さら]
奨励者紹介	同志社大学神学研究科生

「そこで、わたしのこれらの言葉を聞いて行う者は皆、岩の上に自分の家を建てた賢い人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家を襲っても、倒れなかった。岩を土台としていたからである。わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。」

(マタイによる福音書 七章二四―二七節)

『アンパンマンのマーチ』より

本日は音楽礼拝です。今日は讃美歌ではないですが、私が最近改めて好きになった歌をご紹介しますと思います。奨励のタイトルを見てピンときた方もおられるかもしれません。今日ご紹介したい歌は、『アンパンマンのマーチ』です。日本に住んでいる方でしたら、誰もが一度は聞いたことがあるのではないのでしょうか。このアンパンマンは一九七三年にやなせたかしさんが描いた絵本として誕生しました。その後一九八八年にテレビアニメ化され、主題歌の『アンパンマンのマーチ』も誰もが知るものとなりました。今日の奨励のタイトルは、この曲の歌詞から取りました。少し、歌詞をご紹介しますと思います。

「そだ うれしいんだ
生きるよろこび
たとえ 胸の傷がいたんでも
なんのために生まれて なにをして生きるのか
こたえられないなんて そんなのはいやだ！
今を生きることで熱いころ燃える
だから君はいくんだ ほほえんで」

改めてこのアンパンマンのマーチを聴くと、この曲が私たちに對して大きな問いを投げかけていることに気づかされます。アンパンマンのマーチは問うています。「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」と。そして、「こたえられないなんて、そんなのはいやだ」と強く訴えかけています。

私たちはこの問いに答えられるのでしょうか。そしてその答えを見つけてきたのでしょうか。もう見つけたという人もおられるかもしれませんが、これかもしれないという手応えを感じている人もおられるかもしれません。しかし、この問いに答えられないという人もおられるでしょう。そしてこの問いに答えられないからこそ、苦しみ・悩みを抱えている方もおられるのではないのでしょうか。

私たちは生きていくなかで、このアンパンマンのマーチが問かける「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」という問いに、一度ならず、何度も直面します。

この問いに対する答えは一つではありません。すなわち、これだと確信を得た答え一つで、生きていくなかですべてを乗り切っていけるものではないのです。私たちは生きていくなかで、様々な困難や苦しみ・悲しみに幾度なく遭い、その都度、この問いに直面します。昨日まで自分を支えていた答えが、もう今の自分には役に立たないことを知って愕然とすることもあつたでしょう。もしくは、このような問いを考えることも答えることも、必要なかった人が、ある状況のなかでこの問いに直面し、答えられないことを思い知らされ、失意のなかで沈んでいくこともあるでしょう。私たちはその度に、自分の出した問いの答えがあやふやであり、不安定であることを痛感させられるのです。

語りなおし

ある精神分析医は、アイデンティティー、つまり「自分が何者であるかの根拠となるもの」は、「自分が自分自身に語って聞かせる物語だ」と言っています。自分は誰の子か、自分は男女どちらの性に属しているのか、自分は何をするためにここにいるのか。このような問いが、人のアイデンティティーの核にあり、これら一つでも答えが不明になったとき、私たちの存在は大きく揺らいでしまうというのです。

未曾有の災害で家族を亡くした人、住む場所を失った人たちはまさに、アイデンティティーの核にある問いに直面し、自分の存在についての問いに大きく揺らいでおられます。災害だけではなく、重い病に侵された人、事業に失敗した人、挫折を味わった人、大切な人やものを失った人は、自分への問いの答えを見失い、自分の存在に大きな疑問をもち始めるのです。たとえ、重い病に侵されなくとも、大切な人を失わずとも、心のバランスが崩れたとき、私たちは自分の存在に疑問を抱くこともあるでしょう。自分を支えていた土台を失ったがゆえに、どのように立って歩いていけばよいのか、わからなくなるのです。

では、人は土台を失ったとき、どうすればよいのでしょうか。哲学者の鷲田清一さんはこう言っています。

「理不尽な事実、納得しがたい事実をまぎれもないこととして受け入れるためには、自分をこれまで編んできた物語を別なかたちで語りなおさなければならない。人生においては、そういう語りなおしが幾度も強いられる。そこでは過去の記憶ですら、語りなおされざるをえない」と。(二〇一一年八月十一日付 朝日新聞朝刊より)

つまり、今まで自分を支えていた土台が壊れたとき、私たちはそれまでの土台によって支えられていた自分の人生の経験を、自転車のパーツのように一つ一つバラバラにし、また新たな形で構築していかなければならなくなるのです。それは言葉で表すほど簡単なことではありません。バラバラにしてしまつたら、元に戻せなくなる可能性もありますし、新たな形で構築することに大きな時間と労力を必要とするからです。

それでも私たちは、その辛い作業を行わなければ、失ってしまった土台を立てなおすことはできません。そのために、自分自身のこれまでの経験を一つ一つ改めて語りなおさなければならないのです。鷲田さんはこうも言っています。

「語りなおすというのは、自分の苦しみへの関係を変えようとするのだ。だから当事者自らが語りきらなければならない。が、これはひどく苦しい過程なので、できれば良き聞き役がいる、マラソンの伴走者のような」。

イエス・キリストを土台に

では、私たちがこのようなことに直面するとき、誰を伴走者として語るのでしょうか。家族でしょうか、友人でしょうか、それとも見知らぬ誰かでしょうか。

このような状況を考えてとき、私は今日読んでいただきました聖書の箇所を思い起こしました。それは、イエスが語った有名な言葉であります。ここでは、イエスを土台として生きていく人びとが、頑丈な岩の上に家を建てた人としてたとえられています。イエスという頑丈な岩の上に家を建て、生きていく人は、様々な困難にあつても倒れないということが描かれています。

人は自分自身の存在というものに、常に揺らいでいます。それは現代を生きる私たちもそうですが、二〇〇〇年前のイエスの時代の人びともそうでした。自分を揺るがす困難に遭うたびに、自分を支えている土台はグラグラと揺れていました。そして悲しみ苦しむ人びとにイエスは語りかけたのです。私を土台に据えなさい、と。そうすれば、岩の上の頑丈な家のようにどんなことが起こつても決して倒れることがないから、と。

イエスを土台に据える。言い換えれば、自分自身のアイデンティティーの核となる部分にイエスを立てるということです。それは一体どうということなのでしょうか。

自分自身の土台を構築しなおす作業のための「語りなおし」は、「祈り」に似ています。自分が大きな困難や悲しみに直面したとき、「なぜ私にこんなことが起こるのか」「なぜ自分にこのようなことがふりかかるのか」その理由を考え、自分が納得する答えを探して、もがきます。そしてそれは、神に向けられることもあります。「なぜ神はこのようにに遭わせるのか」「なぜ自分が悲しまなければならないのか」そして、「できるならば、自らの苦しみを取り除いてほしい」と願う祈りです。その祈りの言葉は、神への非難が含まれているかもしれませんが、自分の悲しみを吐露するものばかりではありません。それでも、その祈りは自分の口から、何よりも心から語られるのです。そして、語りなおされていくのです。

その祈りという語りなおしの先にはイエスがおられます。私たちの怒り・悲しみ・苦しみの言葉に対して耳を傾けておられるのです。それは、語りなおしの伴走者ということもできるでしょう。

私たちは自分の祈りの先に、イエスの存在を微かにでも感じることで、祈りの言葉を紡いでいくことができるのです。そして、少しずつ新たな土台を作り上げるとき、確かにそこにイエスがおられ、イエスが自分の土台のなかにおられることを感じるのです。

なんのために生まれて、なんのために生きるのか。その問いにもがき苦しむとき、イエスは確かにそばにおられるのです。